

第4章 小野田

現在の海岸線は、江戸時代以降に開作や干拓によってできたもので、それ以前は一面の海でした。小野田地区は、明治以降セメント会社を始め多くの工場が建てられ、市街地化が進んだ地区でもあります。現在、この地には商業施設や住宅が密集し、多くの文化・スポーツ施設が立ち並んでいます。



写真位置図 国土地理院地図

1. 市街地化への歴史

(1) 小野田地区の開作・干拓・埋立地

開作や干拓・埋立が行われる前の小野田地区はどのような景色だったのでしょうか。江戸時代の史料には次のようにあります。

『防長風土注進案』

「西は城戸・刈屋の両浦、西の浜の塩竈、野来見・小野田の渚涇に往来仕候、此間都て浅海、大汐の節ハ凡地方よりも式拾丁も干潟に相成、高泊御開作より縄地の鼻、吉田御宰判梶浦宮崎の岬、清末長府壇の浦干珠満珠の二島まで一面に見渡候事」

「刈屋浦下より北入海小野田迄凡式拾丁程の間遠干潟、干詰地方より凡三拾丁程、大汐満詰式尺位、程沖中にて深サ壺丈位」

この内容からも、小野田の遠浅の地形と、その海岸の渚を人々が往来していた様子を読み取ることができます。

小野田地区は、江戸時代以降、南から北の方へ順に土地が広がっていきました。東沖干拓は災害に備え、高潮を防ぐ意味もありました。

①小野田新開作（明治4年（1871））

②東沖干拓（昭和34年（1959））

③小野田中開作（慶応3年（1867））

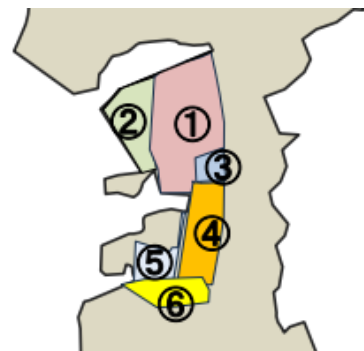
④小野田古開作（安政2年（1855））

⑤新沖埋立地（昭和4年（1929））

⑥西の浜開作（延享元年（1744））

※年号は汐止めまたは工事着手の年

※「スマイルコースト・ウォーク」の進行順に沿って付番



小野田地区開作・干拓・埋立地 地図

(2) 市街地化へ

明治14年(1881)に笠井順八が、小野田地区の開作地に日本初の民間セメント製造会社、「小野田セメント」(現太平洋セメント株式会社)を設立し、小野田のまちが発展していき

ました。
まちの発展については、山陽小野田市ふるさと文化遺産『小野田セメントと笠井家』や『窯のまち』に詳しく掲載しています。

また、海岸線付近にある東沖緑地や新沖緑地は、工業地域と住居地域との間に設けられた緩衝緑地です。これは、視覚遮断、騒音防止などの効果や、市民のレクリエーション活動の場、都市景観の向上、都市防災などの効果をねらい建てられました。東沖緑地の付近には商業施設のほかに、野球場やサッカー場などのスポーツ施設があります。



野球場付近 昭和38年(1963)
(歴史民俗資料館データ管理) ★23



小野田市街地の様子 令和6年(2024)撮影 ★24

セメント町から西の浜に向かう直線の道は、以前は小野田古開作の西沖堤防で「八丁土手」と呼ばれていました。開作地の水をいったん溜めていた遊水池は、ほとんどが埋め立てられ北竜王町に一部を残し、住宅地となっています。地形にその名残を感じられます。



小野田古開作の堤防跡「八丁土手」 現在の港町付近
年未詳(社会教育課管理) ★25

※写真奥に竜王山が見えます。

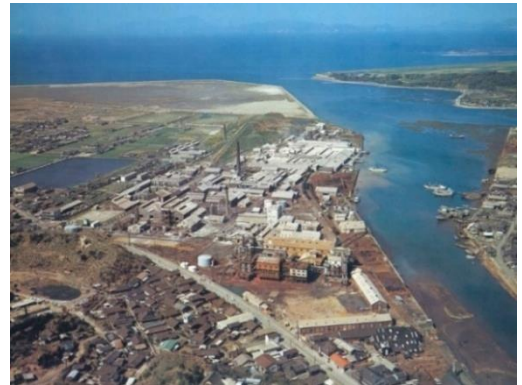


小野田古開作の堤防跡「八丁土手」 現在の港町付近
令和7年(2025)撮影 ★25

2. 産業と共に変わりゆく風景

(1) 日産ダヴ

現在の中央図書館や歴史民俗資料館、市民館がある場所には、通称「日産ダヴ」と呼ばれる貯水池がありました。(写真左側の長方形)これは、日産化学株式会社小野田工場により大正12年(1923)頃に、工業用水として利用するために造られたものです。写真上側には、昭和34年(1959)に造成された東沖干拓や縄地など当時の有帆川河口の様子が伺えます。



日産ダヴ 昭和36年(1961)
《『日産八十年史』より転載》★26

(2) サッカー場とサッカー交流公園

市サッカー場は昭和38年(1963)に開催された第18回国民体育大会(山口国体)を機に小野田新開作地に建設されました。その後、昭和57年(1982)から高校サッカーフェスティバルが始まり、サッカーが広く市民に親しまれています。



山陽小野田市サッカー場 昭和38年(1963)
(歴史民俗資料館データ管理)★27

東沖干拓は農業用地、工業用地と時代に合わせ役割を変え、平成18年(2006)、その干拓地の一部に山口県がサッカー交流公園を開設しました。令和3年(2021)に市営となり、現在プロサッカーチームである「レノファ山口FC」の練習拠点にもなっており、市内外から多くの人が訪れています。



山陽小野田市立サッカー交流公園
(愛称 おのサンサッカーパーク)
令和7年(2025)撮影 ★28

(3) 塩浜石炭焚滓堆積地

この史跡は、江戸時代に西の浜周辺の塩浜で製塩燃料として使われた石炭の焚き滓が堆積したものの一部です。赤崎神社境内の木戸・刈屋口参道に面し、最高約2.4m堆積しており広さ約103㎡あります。塩の製造や石炭の歴史を知る貴重な文化財です。



塩浜石炭焚滓堆積地 令和7年(2025)撮影
★29

コラム③ 昭和 17 年 8 月 27 日～未曾有の大風水害～

毎年どこかで災害のニュースを目にします。過去を振り返ると、山陽小野田市域で被害の大きかった災害に、昭和 17 年（1942）の台風 16 号（周防灘台風）による風水害があります。8 月 27 日の夜に山口県の西側を通過した台風は、県内各地に高潮、暴風、洪水による被害をもたらしました。当時の生田村、厚狭町の海岸沿いでも被害があり、埴生浦の住民は「家財、漁船、漁網の一切を失った」といい、梶浦開作地では堤防が決壊し、田に海水が流れ込み、稲はほとんど流失したそうです。

山口県内でこの台風の被害が特に大きかった自治体の一つが小野田市です。周防灘に面する堤防が決壊し、市街地が一面海と化しました。その間 30 分くらいの時間だったそうです。小野田市の被害は、死者 141 名、家屋倒壊 195 軒、流失 96 軒、床上浸水 8,218 軒という記録があり、市在住の人々のほとんどが罹災したとされます。小野田市の罹災 30 日後も建物の一階が完全に水に浸かり、人々が筏で移動している写真が今に伝わっています。当時の県の記録から、小野田市の浸水地域は、江戸時代以降の開作地とほぼ一致していることがわかります。

罹災後、小野田市へは人々が集まり、決壊した堤防の修復を行い、全国各地から衣類や寝具類の提供を受けました。そのおかげで罹災の 1 年後には、小野田市は復興しました。全国各地からの支援に対する感謝の意を忘れないために建てられたのが、シルバー人材センターの前にある「風水害救援感謝碑」です。市内で唯一、自然災害伝承碑の地図記号が使用されている場所です。

このような災害についても、私たちは忘れてはいけない「記憶」や「風景」として心に留めておくべきなのかもしれません。



水害時の様子 昭和 17 年（1942）
（中央図書館蔵）★30



30 日後の六十番 昭和 17 年（1942）
（中央図書館蔵）★31



風水害救援感謝碑
平成 26 年（2014）撮影 ★32

